



Title	<翻訳>「子ウサギのテレコ」 ムリロ・ルビアン
Author(s)	ルビアン, ムリロ; 平田, 恵津子
Citation	ブラジル研究. 2016, 12, p. 73-82
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106555
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「子ウサギのテレコ」 ムリロ・ルビアン

訳・平田 恵津子

わたしにとって理解しがたいことが三つある、
四つ目についてはまったく理解不能である。
すなわち空を飛ぶはげたかの道、
岩の上を這うへびの道、
海を進む船の道、
青春期の男の道のことである。
(箴言、30:18, 19)

— ねえ、タバコを1本くれないかな？

その声はまるでささやいているかのように小さかった。わたしは海を向いたまま身動きもせず、くだらない思い出にふけていた。

物乞いはしつこく繰り返した。

— ねえ、ねえ！ねえったら！タバコを1本おくれよ。

波打ち際を見つめながら、わたしはつぶやいた。

— あっちへ行きな、小僧。さもないと警察を呼ぶぞ。

— わかったよ。そんなに怒らないでくれよ。あと、僕の前からどいてくれないかな。僕だって海を見るのが好きなんだ。

わたしはそいつの無礼な態度にひどくいらだち、蹴りを食らわすつもりでふり返った。ところが、拍子抜けしてしまった。というのも、わたしの目の前にいたのは灰色の子ウサギだったからだ。子ウサギはわたしに気を使ってこう尋ねた。

— きみがくれないのは、持っていないからだよね？

思いやりのあるその言い方にわたしは心を動かされた。彼にタバコをあげて、彼がもっとよく海をながめられるよう横に移動した。彼は感謝するそぶりすら見せなかったが、わたしたちはすぐに、まるで古い友人同士であるかのように会話をしていた。いや、正確に言うと、子ウサギだけが話していた。あまりに驚くようなできごとや、途方もない冒険談を語るのも、わたしは、彼が見かけほど若くないのだろうと思った。

午後も終わりがけたころ、わたしは彼にどこに住んでいるのか尋ねた。すると、決まったすみかはないと答えた。路上が彼の居場所だった。そのとき、わたしは彼の眼をじっと見た。おだやかで、悲しげな眼。私はその眼に哀れを感じて、一緒に暮らさないかと誘った。家は大きくて、ひとり暮らしだから、と付け加えた。

その説明に彼は納得しなかった。そして私の真意を明らかにしようとした。

— もしかすると、あなたはウサギの肉がお好きなのですか？

返事は待たなかった。

— もしお好きなら、ほかをお探しください。なぜなら、気まぐれが僕の弱点だから。

そう言いながら、彼はキリンに姿を変えた。

— 夜には、蛇かハトになりますよ。こんなに不安定な同居人でもかまいませんか？

わたしはかまわないと答え、わたしたちは一緒に暮らすようになった。

彼の名前はテレコといった。

しばらく一緒に暮らしてから、彼がやたらとほかの動物に変身するのは、近くにいる人を喜ばせたいと思っているからに過ぎないことがわかった。子どもや老人に親切にするのが好きで、巧みなジャグリング¹で彼らを喜ばせたり、いろいろと手助けしたりしていた。朝、子どもたちと駆け回っていた馬が、夕方にはゆったりした歩みで、老人や体が不自由な人たちを家まで送り届けるのであった。

隣人のなかには、テレコが快く思っていない者もいた。そうした連中の中に高利貸しとその姉妹がいたが、彼らの前に現れるときテレコはライオンかトラの姿になった。彼らを驚かせようとするのは意地悪からというよりもむしろ、わたしたちを楽しませたかったからだ。ただ被害者たちはそのようには理解せず、警察に苦情を申し立てていたが、警察は無駄にその苦情を受け付けることしかできなかった。というのも、わたしたちの家をいくらひっくり返して探しても、子ウサギのほかになにも見つけることはできなかったからである。捜査官たちは告訴人に腹を立て、彼らのほうを逮捕すると脅した。

この落ち着きのないわたしの同居人の悪ふざけがやっかいな事態を招くのではないかと、不安になったことが一度だけある。いつものように警察署長の訪問を受けていた時のことだったが、テレコが軽はずみな悪意にかられて突然イノシシに変身したのである。変身してから元の姿に戻るまで、とても素早かったので、警察署長は叫ぶ時間すらなかった。あまりもの恐怖で口を開きかけたとき、彼の目の前にはおだやかな子ウサギがいた。

— わたしが目にしたものをあなたもご覧になりましたか？

わたしはどうにか素知らぬ顔を装って、何も変わったものは見ていないと答えた。

警察署長は疑わしように私を見て、ひげをなでると、あいさつもせず立

¹ ボールや輪、ナイフなどを投げたり受けたりする曲芸。

ち去った。

．．．

テレコは私にもいたずらを仕掛けてきた。家が空っぽのときは、彼が小さな動物に姿を変え、どこか隅っこに隠れていることをわたしは知っていた。あるいはノミに変身してわたしの体に潜んでいて、指のあいだをすり抜けたら、背中を走ったりしていた。我慢も限界に達して、悪ふざけをやめるようわたしが頼むと、逆にびっくり仰天させられることもしばしばだった。わたしの足もとにヤギが現われ、全速力でわたしを裏庭まで担いでいくのだ。わたしは激怒し、たっぷりげんこつを食らわしてやると彼を脅すのだが、テレコが反省したふりをして、わたしに優しい言葉を投げかけると、わたしたちはすぐに仲直りしていた。

テレコは愛嬌のある友人でもあり、突然マジックを披露してはわたしたちを喜ばせた。カラフルなものが好きで、色とりどりの羽をまとったまったく見たこともない鳥や、絶滅してしまった鳥に化けて現われていた。

— そんな鳥はいないよ！

— わかってるさ。でも、みんなが知っている動物にばかり化けてももつまらないよ。

．．．

わたしとテレコのあいだにはじめて深刻な軋轢が生じたのは、わたしたちが知り合って1年たったときのことであった。わたしは兄嫁のエミと家族の問題について激しく言い争って、彼女の家から帰宅しているところだった。むしゃくしゃしながら家に帰りつき、玄関のドアを開けたところ、そこで目にした光景は私の苛立ちを一気に高めた。そこには、若い女といまいましいカンガルーが腕を組んで、応接間のソファーに座っていたのだ。そいつは仕立ての悪い服を着ていて、その目はありきたりのメタルフレームの眼鏡の後ろに隠れていた。

— あなたはそのおぞましいけだものに何をお望みなのでしょうか？

自分の家がよそ者に侵入されているのを見て、いらいらしながらわたしは女に尋ねた。

— 僕はテレコだよ。カンガルーが先回りして、くすくす笑いながら答えた。

わたしはそいつを軽蔑の目でじっと見た。毛が薄く、卑屈で不誠実そうなその動物を。そこにはあのいたずら好きな子ウサギを思い出させるようなものは何もなかった。

わたしはその主張を真実として受け入れることを拒んだ。というのも、テレコの目は悪くなかったし、もし服を着て現れるとしたら、そんな服装ではなく、もっとセンスが良いものを選ぶに違いない。

私が疑わしようにしているのを見て、そいつはアマガエルに姿を変えた。ダンスの上に飛び乗ってから、わたしの胸もとに飛び込んできた。わたしは吐き気をよおしながら、そいつを遠くに放り投げた。

そいつはカンガルーの姿にもどると、大真面目な様子でわたしに尋ねた。

— これでわかったかい？

— わかった。それで？おまえの望みは何なんだ？

— 今日から僕はずっと人間でいるよ。

— 人間？ — わたしは困惑して尋ねた。そしてそのばかげた状況に耐えられずに、大笑いをした。

— じゃあ、それは？ — わたしは女を指さした。 — ヤモリかサンショウウオのこどもかい？

女は憎悪に満ちた目でわたしを見た。そして言い返そうとしたが、カンガルーが口をはさんだ。

— テレザだよ。これから僕たちと一緒に暮らすんだ。きれいだろう？

．．．

疑問の余地なく、彼女はきれいだった。わたしはその晩、彼女のことと、自分を人間だと主張するテレコの愚かしさについてぐるぐると考えて、一睡もできなかった。

朝早くベッドから出て、前の日に起きたことはわたしの同居人のただの悪ふざけに過ぎないことを期待しながら、リビングルームへ行った。

だが、わたしは間違っていた。カーペットの上で、女のとなりに横たわったカンガルーが大きないびきをかいて寝ていたのだ。わたしは彼を起こそうとして腕をひっぱった。

— ほら、テレコ、いい加減にしろよ。

テレコはぎょっとして目を開けたが、それがわたしだとわかったと、ほほえみながら言った。

— テレコだって！？わたしの名前はバルボーザ、アントニオ・バルボーザだよ。ね、テレザ？

目を覚ましたばかりの女は首を縦に振って同意した。わたしは怒りを爆発させた。

— もしお前がバルボーザなら、出て行け！そして二度とこの家に足を踏み入れるんじゃない！

涙が彼の頬をつたった。彼はわたしの前にひざまずき、わたしの脚をなでながら、せめて仕事が見つかるまで家から追い出さないでほしいと懇願した。

カンガルーが職を得られるかどうかは疑わしかったが、彼の涙は先ほどのわたしの決意をひるがえらせた。いや、正直に言うと、わたしたちのやり取りを不安げに見守っていたテレザのすぎるようなまなざしにわたしは心を動かされたのだ。

．．．

バルボーザには不快な癖があった。しょっちゅう唾を吐きちらし、めったに風呂に入らなかったが、そのくせひどく見栄っ張りで何時間も鏡の前に立っていた。わたしのひげ剃りと歯ブラシを使うので、それらを彼に買い与えたが、結局、わたしのものと自分のものを使うので、ほとんど意味がなかった。もしわたしが文句を言うと、うっかりしていたと謝るのだった。

彼の粗野な外見もわたしに嫌悪感を抱かせていた。皮膚は脂ぎっていて、

手足は短く、本心は隠していた。必死でわたしを喜ばせようとして、面白くもない冗談を言ったり、わたしの人柄を大げさにほめたりした。

その一方で、彼がつくうそや、食事の際、手を使いながら口いっぱいにおぼって、音を立てながら食べる様子は耐えがたいものだった。

おそらくわたしがテレザの魅力の虜になっていたから、あるいは、彼女を不快な気持ちにさせたくなかったから、わたしは不満も言わずに、うっとおしいバルボーザの存在を受け入れていたというのが正しいだろう。

テレコが自分のことを人間だとわたしたちに思い込ませようとするのはばかげたことだとわたしが言うと、彼女は驚くべき信念をもって私に言った。

— 彼の名前はバルボーザで、れっきとした人間だわ。

カンガルーはわたしが彼の同棲相手に関心を抱いていることに気づくと、それをわたしの弱みと混同して、ずうずうしくなり、わたしの服を着たり、わたしのタバコを吸ったり、わたしの財布からお金をくすねるようになり、そのことについて責めるわたしをばかにするようになった。

わたしは、機会があるごとに、彼のわずかな情け心に訴えかけながら、ウサギに戻るよう懇願した。

— ウサギに戻るだって？わたしはかつて動物だったことなんか一度もないよ。そもそも君が誰のことを言っているのかさえわからない。

— わたしが言っているのは、いつもほかの動物に姿を変えていた灰色のかわいらしいウサギのことだよ。

．．．

そのあいだも、わたしのテレザへの愛情は悲観的な思いの中で揺れ動いていたが、わたしの愛が報われるという希望はほとんどなかった。だからためらいはあったが、わたしは彼女に結婚を申し込むことにした。

彼女は冷たく、率直な言い方でこの問題に片をつけた。

— あなたの申し出は、あなたが考えているほど気前のよいものではなくってよ。彼のほうがよほど価値があるわ。

わたしを拒絶するために使われたこれらの言葉は、彼女が怪しげなやり方でテレコの力を利用しようと考えていることを私に想起させた。

結婚の話がうまくいかなかったわたしは、もはや攻撃的な態度を取ることなく、ふたりが親しげにしている様子を見ていることができなくなった。

カンガルーはわたしの態度の変化に気づき、わたしに出くわしそうな場所を避けるようになった。

．．．

ある日の午後、仕事から帰ってくると、最大の音量でかかっていたレコードプレーヤーの耳をつんざくような音にわたしの警戒心は高まった。ドアを開けるとすぐに、怒りで頭に血が上るのを感じた。そこでテレザとバルボーザがほおを寄せ合って、下品なサンバを踊っていたのである。

わたしは激怒してふたりを引き離した。カンガルーの首根っこをつかんで、激しく揺さぶり、そいつを部屋の鏡の前に突き出した。

— これがけものじゃないって言うのか？

— 違う、僕は人間だ。— 彼は足をバタバタさせながら、わたしの目の中に宿っていた激しい怒りを見て、恐怖におびえ、すすり泣いた。

叫び声を聞いて、助けに来たテレザに対して、彼は尋ねた。

— 僕は人間だよな？彼にそう言ってくれよ。

— もちろんよ、あなた。あなたはれっきとした人間よ。

わたしにとってそれがいかにばかげたことに思えようとも、彼らの言葉にはどこか悲劇的な誠実さがあつた。しかし、わたしは決断した。バルボーザを床に投げ飛ばし、口のあたりを殴った。それから、ふたりを追い出した。

テレザはとても興奮して、通りからわたしにこう言い放った。

— わたしがバルボーザを立派な人間にしてみせるわ、このくそ野郎！

．．．

わたしが彼らの姿を見たのはそれが最後だった。その後、バルボーザという魔術師が町で成功を収めているというぼんやりした知らせを聞いた。しか

し、それ以上詳しいことはわからなかったもので、名前が同じなのは単なる偶然の一致だろうと思い込んだ。

わたしのテレザへの思いは時間とともに消え去り、切手への関心がよみがえった。ひまな時間があれば、わたしは切手の収集に費やすようになった。

ある晩、わたしが前の日に受け取った希少な切手をまさに貼ろうとしていたとき、窓の外から室内めがけて一匹の犬が飛び込んできた。驚きから我に返って、わたしはその犬を追いかけようとした。しかし、そいつを追いつて立てる前のことだった。

— 僕だよ、テレコだよ。— ひどくふるえた悲しげな声でそう言うと、そいつはアグーチの姿に変わった。

— それで彼女は？ — わたしは無関心を装いながら尋ねた。

— テレザは… — 最後まで言い終わらないうちに、今度はクジャクに変わった。

— いろんな色があって…サーカスが…彼女はきれいだった…恐ろしかったのは… — 鈴のような音をたてながらガラガラヘビが話し続けた。

短い沈黙があって、また話し出した。

— 制服が…とても白くて…5本のローブが…明日、僕は人間になるんだ…

テレコがほかの動物に変身しているあいだ、言葉は、なんの脈絡もなく、ひねり出されてきた。

ちょっとのあいだ、テレコは咳きこんだ。それは神経性の咳だった。はじめ弱々しかったが、テレコがより大きい動物に変身するにつれて、それも大きくなった。そして、わたしはそのあいだ、彼にじっとしているようただ哀願するのだった。しかし、彼は自分を抑えることができなかった。

意味もなく自分自身を表現しようとしていた。変身の間隔は短くなり、混乱していた。

— いい加減にしてくれよ。もっと落ち着いて話してくれ。— 続けざまに変身するテレコにいらだって、わたしは言った。

— できないんだよ。— トカゲの姿のテレコが声をふるわせながら答えた。

何日か経ったが、同じ混乱が続いていた。テレコは家の隅でふるえながら、嘆く一方、ひっきりなしにありとあらゆる動物の姿に変身していた。何度も言葉を詰まらせ、食事をとることすらできなかった。というのも、姿を変える動物の大きさに応じて、大きくなったり、小さくなったりしていた口が、必ずしもそのときの食べ物の大きさに合っているとは限らなかったからだ。そんなとき彼の目からは涙が流れ出たが、ネズミの小さな目に浮かんだちっぽけな涙は、カバの顔で巨大な涙に変わるのだった。

わたしは彼の苦しみをやわらげてあげることができず、ただ泣きながら彼を抱きしめていた。しかし、彼の体はわたしの腕の中で突然大きくなって、わたしを壁にたたきつけるのであった。

彼はもはや話していなかった。モーモー、カーカー、ベヘー、ブーブー、ウウォー、ピウピウ。

しまいには、少しだけ落ち着いて、小さな動物にしか変身しなくなり、悲しげに鳴く子羊の姿でおさまった。わたしが子羊を手にとると、その体は燃えるように熱く、汗をかいていた。

最後の夜、テレコはかすかにふるえていたが、少しずつ静かになった。徹夜で寄り添って疲れていたわたしは、目を閉じると眠ってしまった。目が覚めたとき、わたしは腕の中で何かが変わっているのに気づいた。わたしの胸に抱かれていたのは赤ん坊だった。薄汚れていて、歯がなく、そして死んでいた。

出典 Murilo Rubião, “Teleco, o coelhinho”, *Contos reunidos*. São Paulo: Ática, 2005.